

法蔵の『梵網經菩薩戒本疏』に関する一考察

—元暁との関連を中心として—

花園大学大学院 博士後期課程

法長（李忠煥）

序文

大乘菩薩戒を代表する經典である『梵網經』は、天台智顛（538～597）の『菩薩戒義疏』（以下『智顛疏』と呼ぶ）以来、元暁（617～676）、法蔵（643～712）、勝莊（生没年未詳）、義寂（681～？）、太賢（生没年未詳）などの註釈家たちによって、より大乘的に註釈され、東アジアを代表する菩薩戒として発展される。特に当時、最も影響力があった智顛と法蔵の註釈は後代の多くの註釈家に大きな影響を与える。しかし、智顛と法蔵の註釈には戒体論をはじめ犯戒の判断や科文などで相当な相違がある。本研究は智顛以後の『梵網經』の註釈、特に法蔵の『梵網經菩薩戒本疏』に表れている特徴を新羅元暁との関係に注目し、元暁の『梵網經』の註釈書との比較を通じて元暁が法蔵の註釈に与えた影響について調べる。

元暁は新羅を代表する思想家であり註釈家として、一心想念に基づいて和諍と会通の著述をした僧侶である。元暁の『梵網經』の註釈書としては、『菩薩戒本持犯要記』と『梵網經菩薩戒私記』が現存する。『要記』は「梵網戒」・「瑜伽戒」・「比丘戒」の比較を通じて大乘の戒相を論ずる。『私記』は『梵網經』の註釈書として、現在は「十重戒」までの上巻のみが存在する。

元暁と法蔵の影響関係において、法蔵が華嚴と起信論の研究で元暁の著述を参考にして引用したのは今更説明する必要もない。特に法蔵は元暁の影響を受けた一方、元暁の内容が自分の見解と異った場合、それを批判して自分の見解を強く主張する。つまり、法蔵は元暁の学問を土台に自身のみをより一層堅固に発展させたと考えられる。このような元暁と法蔵の関係は『梵網經』の註釈でも確認することができる。法蔵は『華嚴經』とともに菩薩戒の研究を何より重要視した。特に「一切衆生悉有仏性」を通して一切人の受戒を許容し、三聚淨戒を積極的に用いて菩薩戒を単なる禁制の意味ではなく、実践的に活用できる範囲を提示している。さらに菩薩の衆生済度行による犯戒を大乘的に解釈し、たとえ犯戒行に対する業は残るとしても、罪は無いと註釈する。

法蔵のこのような註釈の内容は、元暁の『要記』と『私記』でも積極的に説かれている内容である。本研究では、このような元暁と法蔵の註釈書に表れている戒体論、三聚淨戒、犯戒の判断などを比較し、智顛以後の『梵網經』の註釈書の変遷に元暁が与えた影響を把握し、法蔵が元暁の註釈をどのように理解して引用し、大乘的に発展させたかについて明らかにしたい。